



三菱商事、成田国際空港、日本空港ビルデング、JALUXの日本企業4社が運営に参画し、円借款でモンゴルの首都ウランバートルに

建設された新ウランバートル国際空港（チンギスハーン国際空港）が4日、開港した＝写真。4社の日本企業連合は15年間にわたって空港運営を担う。設計と施工も日本企業が担当した。

新ウランバートル国際空港運営事業は、滑走路・エプロンなど土木施設の維持管理と、旅客ターミナルビルの運営などを行う。日本企業連合は、モンゴル国営企業とともに設立した空港運営会社に51%を出資している。

新ウランバートル国際空港が開港

日本企業4社が運営に参画

主な施設として、延長3,600mの滑走路1本と、延べ3万5,300平方mで年間200万人の旅客処理が可能な旅客ターミナルビルがある。設計は梓設計・オリエンタルコンサルタンツグローバルJV、施工は三菱商事・千代田化工建設JVが担当した。総事業費は757億円で、うち円借款が657億円。2020年4月に完成した。

この案件は、太田昭宏国土交通相（当時）による14年4月のトップセールスを契機とする官民を挙げた取り組みで、日本企業連合による空港運営権の獲得に至った。海外インフラ展開法で海外業務の実施が追加された成田国際空港が、海外空港の運営に参画した第1号案件でもある。

赤羽一嘉国交相は2日の閣議後会見で、「日本・モンゴルの二国間協力の新たな象徴として、高い空港運営能力を有する日本企業連合によって運営されることで、観光や流通を促進し、モンゴル国の発展に寄与するものと期待している」と述べた。